広島大学　学部・附属学校共同研究機構研究紀要
〈第42号　2014.3〉

新学習指導要領の下での授業実践
―小中連携を意識した学習指導について（２）―

松尾　砂織　　小廣川和恵　　デミール千代　渕山　真悟
（研究協力者）樫葉みつ子　　柳瀬　陽介　　松宮奈賀子

１．はじめに

本学校園で小中学校合同の外国語部会を発足させて２年目，小中連携の内容や方法を模索しながら取り組んでいる。同一敷地内にあるとはいえ，頻繁に授業を見合うことができない中，授業交流以外に動画を通しての連携を行ってきた。共通して取り組むことのできる効果的な言語活動や表現活動とはどのようなものかを探っている。

昨年度は主に小学校と中学校との教材の繋がりに視点を置き，関連する言語活動を検討してきた。具体的には，実際のコミュニケーション場面をゴールとする学習題材の開発として，ネイティブ・スピーカーあるいはそれに準ずる人々とコミュニケーションを行う活動を各学年に位置づけた。そのことで，「コミュニケーションの手段」としての外国語の位置づけが小中学校の双方で明確となった。

児童生徒に学ぶ意義を意識させる方法としては，小中それぞれのコミュニケーション場面をビデオに撮影し，児童生徒が上級学年の姿を視聴して学ぶようにさせた。特に，９年生の活動場面を６年生が視聴したことは，６年生が９年生の姿をモデルとし，身につけたい力やなりたい姿をつかみ，その憧れを中学校の英語学習に向けた意欲に転化したという点で効果的であったと考える。

このように，児童生徒が自らのできるようになった姿を具体的に持ち，表現したいことを自己発信できるような体験を重ねることが，学習活動への意欲や動機付けに重要な役割を果たすという可能性を示すことができたことが昨年度の成果であった。

今年度は，そのようなコミュニケーション場面に向かうまでの学習過程を小中学校で検討し，新学習指導要領の内容に沿って見直しているところである。

２．研究の目的・方法

昨年度行った研究から，小中の円滑な接続を意識した学習指導を進めるために，次の６つの課題が明らかになった。まず小学校外国語活動においては，次の３点である。

①英語を学ぶ意欲を高める。
②話し手・聞き手としての意識を高める。
③挑戦的自己発信の場を作る。

中学校においては，次の３点である。

①「エスコート・プロジェクト[i]」における指導目標を明確にする。
②教科書各単元でのコミュニケーション活動を充実させる。
③目標・指導・評価のさらなる一体化を図る。

これらの課題を克服するために，研究の概要を次のように考えた。

言語活動の場面において，その活動する姿をグループ単位で学習者自身がiPad miniで撮影しあい，グループ内で視聴をする。今行った言語活動の様子を，学習者が個々に即時再生することができれば，客観的に自分の姿と向き合い，良かった点と課題を見いだすことができる。そして，その課題に対して，どのようにアプローチすればよいかを考えることが，教室内のグループ単位でできるようになる。また，児童生徒が個々に表現したもの（音声，文字，非言語）を客観的に観ることで，児童生徒自身によりよい話し手・聞き手として何を工夫改善したらよいか，意味や意義のあるコミュニケーション活動を考えさせる指導も可能となり，学習環境を充実させることができると考えている。さらには，指導者にとっても，生徒個々のコミュニケーション場面を把握することができ，個の指導と評価に活かせると考えた。

Saori Matsuo, Kazue Kohirogawa, Chiyo Demille, Shingo Fuchiyama, Mitsuko Kashiba, Yosuke Yanase, and Nagako Matsumiya: Classes based on the new course of study (2): Bridging the gap between elementary school and junior high school

3．小学校における授業実践

（1）題材について

○単元名　　好きなものを伝えよう
○学年　　　小学校５年39名（男子19名女子20名）
○指導者　　デミール　千代
○実施時期　平成25年７月
○目標

・相手とよりよい関係を築くための方法について考えたり，使おうとしたりすることができる。
（コミュニケーションへの関心・意欲・態度）
・好き嫌いを伝えたり，尋ねたりする表現や語彙，発音に慣れ親しむ。（外国語への慣れ親しみ）
・日本語には，様々な外来語があり，そして外来語とは異なる英語の発音があることに気付く。
（言語や文化に関する気付き）

○単元の評価規準

［ア．コミュニケーションへの関心・意欲・態度］
①自分の好きなことやものを積極的に伝えようとしている。
②相手を意識しながらコミュニケーションを図ろうとしている。

［イ．外国語への慣れ親しみ］
①好き嫌いを伝える表現“I (don't)like ～.”や発音を使っている。
②相手の好き嫌いを尋ねたり，答えたりする表現“Do you like ～?”, “Yes, I do.”, “No, I don't.”を使って会話をしている。

［ウ．言語や文化に関する気付き］
①日本語には，様々な外来語があり，そして外来語とは異なる英語の発音があることに気付いている。
②言語によらない工夫やマナーについて考えたり，気付いたりしている。

○指導と評価の計画（５時間）
表記について･･･ワークシート：WS
発表の様子：発表　　活動の様子：活動

次	○ねらい・学習活動	評価規準	評価方法
1	○自分のことを伝える英語表現や語彙に慣れ親しむ。		
	・果物や動物・スポーツなど，外来語として慣れ親しみのある日本語と英語を比べる活動を通して，音の違いに気付く。	ウ①	発表 WS
	・ゲームやチャンツを通して，自分の好きなものや嫌いなものを表す表現に慣れ親しむ。	ア① イ①	活動 WS
2	○好きなことやものをたずねたり答えたりしながら，積極的に交流を楽しむ。		
	・自分の興味・関心のあるものを友達や先生に好きかどうかたずねる活動を通して，積極的に交流する。	ア②	活動 WS
	・友達をより理解したり，自分との共通点を見つけたりしようとする気持ちを持ちながら交流する。	ア②	WS
	・ゲームやインタビューを通して，相手の好き嫌いを尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しむ。	イ②	活動 WS
3	○相手とよりよい関係を築くためのマナーやポイントについて考えたり，進んで取り入れようとしたりする。		
	・初対面の相手とよりよい関係を築くための工夫やマナーについて考えたり，そのよさ気付いたりする。	ウ②	発表 WS
	・交流のポイントを意識しながら，友達や初対面の人と交流しようとしている。	ア②	活動 WS
時間外	○留学生と交流する。		
	・外国語活動で学習したことを活かして交流する。（あいさつ，自己紹介，インタビューなど）		
	・留学生や出身国のことについて興味を持つ。		

（2）英語を学ぶ意欲を高めることについて

５年生で始まった外国語活動では，本単元までに多言語によるあいさつ，英語での自己紹介（名前，家族），感情，数などの表現や語彙を学んできた。また言葉によらないコミュニケーション手段としてジェスチャーを取り入れながら学習を進めている。単元に入る前に行った調査（平成25年６月27日実施，39名）によると，外国語活動の学習が好きだと回答した子どもは29名であり，歌やゲームだけでなく，英語が話せた時，思いを伝えることができた時など，外国語を使って表現できることに楽しみや喜びを見出している子どもも多い。一方でどちらともいえない，または好きと回答しなかった子どもは，日常生活においても人前で話したり，積極的に自己を表現したりすることが苦手である。また，本学級の外国語活動は担任とJTEで行われており，日常的に外国の人と接する機会がない子どもたちも多く，自由記述では習った英語を使って外国の人と実際に交流をしたいという子どもが26名いた。

そのため，本校がこれまでに取り組んできた「留学生との交流」を本単元終了後に実施するとともに，単元内では，外国の人と実際に会って話す場面を第３次に設定し，単元導入時に子どもたちに伝えた。明確な課題意識を持たせることにより，これまでに学んだ英語を使ってみたい，活かすことができるという期待感，さらにもっと学んでおきたいという学習に対する意欲が子どもたちの言動に表れた。また，自己表現に苦手意識をもつ子どもたちが記入したふり返りには，交流を楽しみにしている一方で不安な様子も見られた。好きなことやものは事前に絵カードを作成して伝えたいことを視覚化することで，言葉によらない伝え方や英語を後押しする方法があることに気付かせた。

（３）話し手・聞き手としての意識を高めることについて

「『外国語を聞くこと，話すこと，読むこと，書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を習得し，実際のコミュニケーション場面で活用して，伝えたいことを発信できる子ども』育成のための方法・手立て」に沿って，話し手・聞き手として意識するべきポイントを単元計画の中で明確にし，指導に取り入れた。また，インタビュー活動の場面においては，iPad miniで静止画や動画を撮影し，その場で話し手・聞き手の様子をふり返ることができるようにした（表１）。

表１　話し手・聞き手として意識するポイント

	話し手	聞き手
第1次	①音声 ・音声の変化:強調（stressing） -I like A. 個人によって異なるAの部分（好きなもの/こと）をはっきりと強く言う。	①アイコンタクト ②うなずく，首をふる ・相手に共感したり，自分との相違点を見つけたりする。
第2次	①音声 ・音声の変化:強調（stressing） -Yes/No. I don't like B. Yes/Noやdon'tを強調して，好きか嫌いかをはっきりと相手に伝わるようにする。 ④ジェスチャー ・Yes/Noで首を縦横に動かして意志が伝わるようにする。	②うなずく，首をふる ・相手に共感したり，自分との相違点を見つけたりする。 ③メモ ・インタビュー内容を記録し，ふり返りに生かす。
第3次	③顔の表情・視線の配り方 ・お互いに顔を見て交流できるようにする。 ④ジェスチャー ・聞きたいこと/ものに動作をつける。 ⑤視聴覚情報 ・絵を補助利用する。	①アイコンタクト ②うなずく，首をふる ③メモ ④良い点を学ぶ ・初対面の人がどのように自分たちに接してくれているかに気づく。

（４）挑戦的自己発信の場を作ることについて

本単元第３次では普段の外国語活動には関わっていない校内の先生や大学の先生をゲストとして迎え，また，単元終了後に広島大学の留学生との交流を実施して，初対面の人と英語を使って交流する機会を設けて自己発信をする場とした。留学生との交流では，これまでに学習したことを使いながら興味のあることをたずねる活動を通して，相手をより知るとともに，自分の班に来た留学生を他の班の友だちに紹介する活動を行って，インタビュー活動をより課題意識を持って取り組むことができるようにした。

図１　留学生との交流の様子・作成した紹介カード

（５）成果と課題

タブレット型端末のよさは撮影したものを活動中であってもその場ですぐに見ることができ，他のグループ活動を中断させずに小集団でふり返りを行うことができることである。また，机上に置いた状態で容易に拡大縮小操作等ができるため，子どもたちにとっても見るポイントをより意識しやすいという利点があった。自分たちがインタビュー活動をしている様子を見た子どもたちはその場で一喜一憂するものの，その後客観的に自分たちの姿と向き合い始め，話し手・聞き手のポイントに沿った気付きが出ていた。

また，通常の学習環境と異なる自己発信の場を設定したことは，自信につながり今後の学習意欲を高めていることが，子どもたちのふり返りから明らかになった。

- これまでに話したことのない先生や男子にもポイントを意識しながらインタビューできた。校長先生にインタビューできたので自信がつきました。（経験の蓄積による自信）
- はじめはこわくて，自分から近づけなかったけど，先生方が声をかけてくれてそこからは自分から話しに行けるようになりました。緊張はしたけれど，いろいろな人に話しかけることができてとても気持ちがいいです。（緊張から達成感へ）
- 初めての人にインタビューする時は胸がドキドキして少し間違えたから，次はスラスラ言えたらいいなと思いました。次に交流する時は進歩していたいです。（次の交流にむけての課題）

さらに，外国の人と交流する上で大切なことについて問うたところ，積極性（伝えようとする気持ち・意思表示・たくさん話すこと），表情や動作（アイコンタクト・うなずき・相づち・笑顔・ジェスチャー），相手意識（思いやり・気持ちを考える・つながり・ていねいさ）など，本単元の目標に沿って子どもたちの思いを様々に育むことができたことが分かった。この学びを大切にしながら子どもたちが行動実践化していけるようにすることが今後の課題である。

４．中学校における授業実践（１年生）

（１）題材について

○単元名　　My Project2 人を紹介しよう

○学年　　　中学校１年40名（男子21名女子19名）

○指導者　　小廣川　和恵

○実施時期　平成25年11月

○目標

・聞き手が理解しやすいように様々な工夫をして話す。(コミュニケーションへの関心・意欲・態度)

・文と文のつながりを意識し，内容的にまとまりのある英文を書く。(外国語表現の能力)

・聞き手を意識して，伝えたい語句を強調して話す。(外国語表現の能力)

○単元の評価規準

［ア．コミュニケーションへの関心・意欲・態度］

①show and tellの際に，聞き手が理解しやすくなるように様々な工夫をしている。

［イ．外国語表現の能力］

①人物の特徴を捉え,文と文のつながりを意識し，内容的にまとまりのある英文を書くことができる。

②聞き手を意識して，伝えたい語句を強調して話すことができる。

○指導と評価の計画（５時間）

表記について･･･ワークシート：WS

発表の様子：発表　　活動の様子：活動

次	○ねらい・学習活動	評価規準	評価方法
1	○本単元で身に付ける技能を知り，最終活動のイメージを持つ。 ・複数のモデル文を比較し，文章構成の工夫に気づく。 ・過去の生徒の作品の一部を提示し，工夫と改善点を考え，文と文の意味上のつながりを理解する。 ・モデル文を用い，聞き手を意識してshow and tellの練習をする。	ア①	活動
2	○スピーチ原稿の下書きの準備をする ・既習の文を使って，思いつくまま箇条書きに書く。 ・箇条書きで書いた文のキーワードをマッピングに書き，更にキーワードを加える。 ・マッピングをもとに，箇条書きのリストにナンバリングをする。	イ①	WS
3	○紹介したい人について，つながりのある３文程度の文を書く。 ・意味上のつながりのある文の特徴を確認する。 ・接続詞や副詞，代名詞に注意して，つながりのある文を３文程度ずつ表に書く。 ・文法的な正しさについて，チェックリストで確認する。 ・接続詞や副詞，代名詞を使うとわかりやすいことを学び合う。	イ①	WS
4	○人を紹介するスピーチ原稿を仕上げる。 ・原稿を仕上げる。 ・チェックリストで文法確認をする。 ・書いた文章を班で読み合う。 ・班で自分の紹介したい人の絵を示しながら，聞き手が理解しやすくなるよう工夫してshow and tellの練習をする。	イ①	WS
5	○人を紹介するshow and tellを行う。 ・show and tellをし，相互評価する。	ア① イ②	活動

（２）目標・指導・評価の一体化を図ることについて

人を紹介する原稿を書く際の目標を,「人物の特徴を捉え，つながりのある文を書くことを通して，まとまりのある英語を書く。」とした。まとまりのある英文とはどのような文章かということを事前に考える際，昨年度の生徒の作品を分析した。全体的な傾向として，文章量は多いが，文の羅列で文と文のつながりが少ない作品が目立った。そこで，なぜinterestingでcoolなのか接続詞があるとわかりやすい例や，頻度を表す副詞を効果的に使うことで具体的にイメージできる例など，文と文の意味上のつながりを中心に分析した（図２）（表２）。

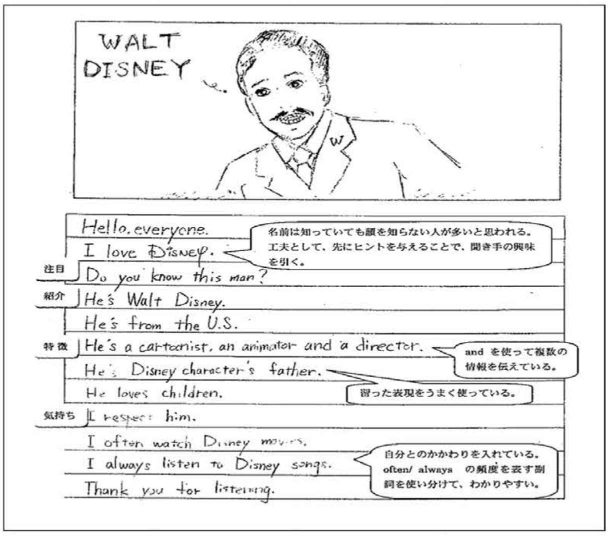


図２　My Project 昨年度の生徒の作品

表２　昨年度の生徒の作品の分析

【導入】Hello, everyone. I love Disney. Do you know this man? He's Walt Disney. He's from the U.S. → 名前は知っていても顔を知らない人が多いと思われる。工夫として，先にヒントを与えることで，聞き手の興味を引く。
【特徴】He's a cartoonist, an animator and director. He's Disney's father. He loves children. I respect him. → andを使って複数の情報を伝えたり，習った表現をうまく使ったりしている。
【自分との関わり】I often watch Disney movies. I always listen to Disney songs. → 自分とのかかわりを入れている。often/ alwaysの頻度を表す副詞を使い分けて，わかりやすい。

分析を通して，生徒が工夫している点や，更に推敲するとつながりがわかりやすくなる点などの傾向を捉えることができた。そして，指導する際の留意点が明らかになった。以上のことを踏まえ，モデル文と評価規準を次のように考えた。

Hello, everyone.
This is Aki.
She is a main character of a TV drama “*Ama-chan*”.
She is from Tokyo but she lives in Kitasanriku. ［接続詞but］
Her grandmother is a woman diver. ［代名詞］
She respects her. 意味上のつながり①
Aki can dive in the sea too. ［副詞too］
She is cute and funny. ［接続詞and］
So everyone likes her. ［接続詞so］
She is a local idol. 意味上のつながり②
I really like her and the drama.
Thank you.

	評価規準
A評価	関連した文が３文程度続いている部分２か所以上ある。
B評価	関連した文が３文程度続いている部分が１カ所ある。
C評価	関連した文が３文程度続いている部分がなく，英文の羅列である。

文法的な正しさについては，人を紹介する文章の特性から主に３単現のｓと代名詞を中心に指導をするが，文のつながりを意識させることを重点項目にすることから，今回は評価しなかった。対策として，書く過程で文法チェックリストを用い，個人や班で文法チェックを行うようにした。

アイデア創出の際にマッピングを行うことは効果的であるが，中１のこの段階で既習の表現だけでは言いたいことを表すことができない場合がある。そこで，まず習った表現をできるだけ活用することを目指し，思いつくまま箇条書きにさせた。その後，書いた文のキーワードをマッピングさせ，更にアイデアを加えていくという方法をとった。そして，マッピングをもとに箇条書きの文にナンバリングをさせていった。（図３・４）その後，代名詞や接続詞，副詞を使い，つながりのある３文程度の文章を意識して書かせた。（図５）

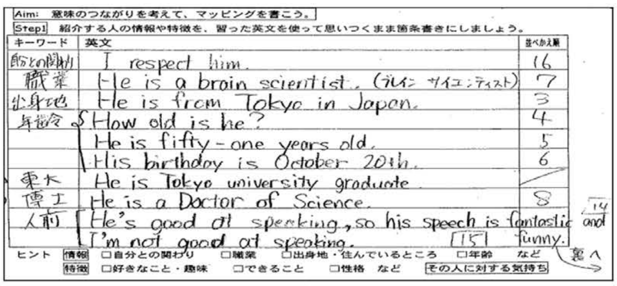


図３　思いつくまま書いた箇条書きの文

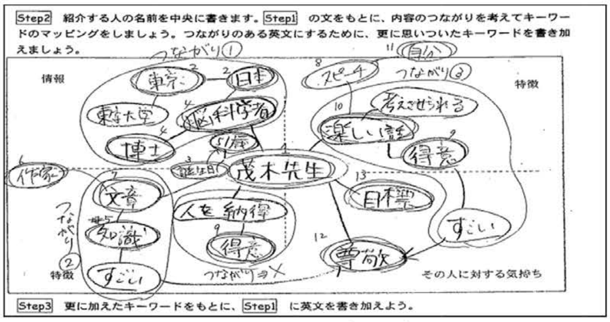


図４　マッピング

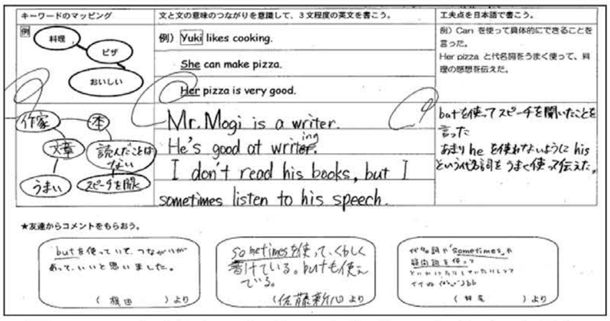


図５　つながりのある３文程度の文を書く過程

（３）教科書各単元でのコミュニケーション活動を充実させることについて

My Project2はProgram5～8で学習したことを統合的に扱う単元であることから，そこに至るまでの指導過程を見直し，関連した言語活動と書く活動を次のように設定した（表３）。

表３　My Project2までの指導過程・目標・活動

単元	文法・内容	関わるコミュニケーション活動・書く活動の目標	人を紹介することにつながるコミュニケーション活動と書く活動
Program5	this, that ／Where の疑問文／he, she	○絵や写真を示しながら口頭で人を紹介する。	This is~. He is~. と人を紹介する基本パターンを言う。→書く。
Program6	３単現の-(e)s（肯定・疑問・否定）	○３人称の主語のとき，適切な動詞の形にして書く。	ペアでインタビュー活動。→インタビューの内容について，３単現のｓを使って報告する文章を書く。
Program7	Who, When の疑問文／her, him	○３人称の主語のとき，適切な動詞の形と代名詞の形にして書く。	ペアでwho, whenを使ったインタビュー活動。→インタビューの内容について報告する文章を書く。
Program8	can（肯定・疑問・否定）／Howの疑問文	○canを用いて自分のことや友達のことを書き，話す。	ペアでcan, howを使ったインタビュー活動。→インタビューの内容について報告する文章を書く。→話す。
My Project2	人を紹介するスピーチ	○聞き手が理解しやすいように様々な工夫をして話す。	人を紹介するshow and tellを行う。

コミュニケーション活動で会話をした後，得た情報をもとに書く活動を習慣化させることにより，My Project2での「人を紹介する」という活動へ向けて，スモールステップで書くことに慣れさせるようにした。その際，Program5～8の新出文法事項である「３人称単数主語の時の動詞のｓ」「代名詞」「助動詞can」について，適切な運用ができるように指導した。そしてMy Projectの最終目標として，文と文のつながりを意識し，内容的にまとまりのある文章を書くために，「接続詞and, but, so」，「副詞sometimes, usually, often, alwaysやtoo」，代名詞を効果的に使用させることを目指した。

（４）成果と課題

「人を紹介する」という最終活動に向けて，つながりのある文章の特徴を分析し，具体的に目標やモデルとなる文章をイメージして指導計画を作成したことは，計画的に関連した文法事項を指導し，コミュニケーション活動を仕組む上で効果的であった。また目標に照らして観点を絞り，評価規準を設定したことで，指導する内容を焦点化することができた。次の作品は，つながりを意識してまとまった英文を書くことができた生徒の文章である。（図６）

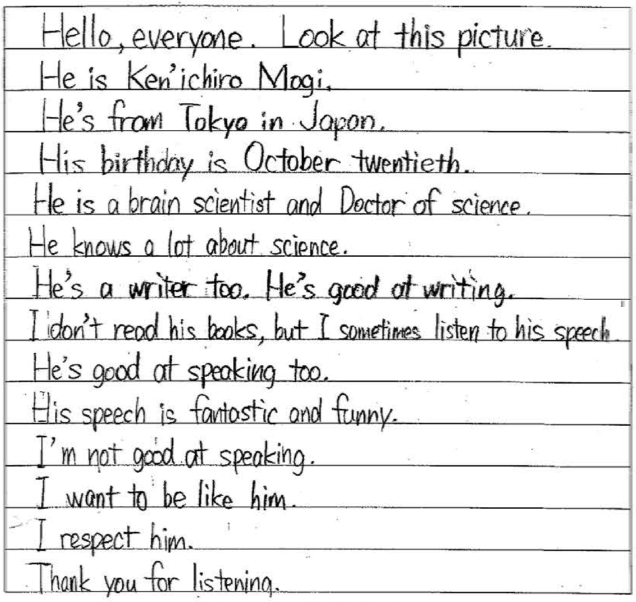


図６　生徒作品

課題として，箇条書きやマッピングでアイデアを創出する際や，英文作成段階でつながりのある文章を作成する際に，書く時間に個人差があり，スムーズな班活動ができなかったことや，学び合いを深めるような展開に導くことができなかったことが挙げられる。今後も改善に向けて取り組んでいきたい。

５．中学校における授業実践（２年生）

（１）題材について

○単元名　Program9　A Priest in a Mask
○学年　中学校２年41名（男子21名女子20名）
○指導者　松尾　砂織
○実施時期　平成25年11月
○目標
・他者の発表に関心を持ち，ペアワークやグループワークにおいて意欲的に学習する。
（コミュニケーションへの関心・意欲・態度）
・比較表現の知識を用いて，正しく口頭で発表する。（外国語表現の能力）
・比較表現を含んだ英文を聞いて，内容を理解する。（外国語理解の能力）
・あらすじを読み，自分の考えを持つ。
（外国語理解の能力）
・比較表現を用いた文の意味・構造を理解する。
（言語や文化についての知識・理解）
○単元の評価規準
［ア．コミュニケーションへの関心・意欲・態度］
①他者の発表に関心を持ち，ペアワークやグループワークにおいて意欲的に学習している。
［イ．外国語表現の能力］
①比較表現の知識を用いて，正しく口頭で発表することができる。
［ウ．外国語理解の能力］
①比較表現を含んだ英文を聞いて，内容を理解している。
②あらすじを読み，自分の考えを持つことができる。
［エ．言語や文化についての知識・理解］
①比較表現を用いた文の意味・構造を理解している。
○指導と評価の計画（８時間）
表記について･･･ワークシート：WS
発表の様子：発表　　活動の様子：活動

次	○ねらい　・学習活動	評価規準	評価方法
1	○比較級を用いた文の意味・構造を理解する。 ・説明を聞いて，比較表現の意味・構造を知る。 ・形容詞の比較級（larger, smaller, bigger, longer, taller）を用いた文の口頭練習を行う。 ・比較級を含む文を聞いて書く練習をする。 ・比較級を用いて，対話文を書く。 ・比較級を用いて，ペアで対話練習をする。 ・比較級を用いて，外国の方に日本のことを紹介する説明文を書く。	ア①	活動
2	○教科書P85の本文を読んで，セルジオのおいたちや夢に関する内容を読み取る。 ・ペアで外国の方に３つの名所（富士山・東京タワー・スカイツリー）を紹介する対話する。	ア①	活動

	・新出単語の意味や発音・アクセント等を知る。 ・本文の音読練習をする。 ・本文に関する英語の質問に答える。 ・I thinkを用いて，セルジオの生き方に対する自分の感想を書く。 ・比較表現を使って，自分の好きなものとその理由について書く。	ウ②	WS
3	○最上級を用いた文の意味・構造を理解する。 ・ペアで比較級を用いて，自分の好きな物について対話する。 ・説明を聞いて，最上級の意味・構造を知る。 ・形容詞の最上級（longest, coldest, warmest, coolest, hottest, highest, tallest）を用いた文の口頭練習を行う。 ・最上級を含む文を聞いて書く練習をする。 ・最上級を用いて，「日本一のもの」についての説明文を書く。	ウ①	WS
4	○教科書P87の本文を読んで，セルジオの活躍に関する内容を読み取る。 ・ペアで「日本一のもの」についての対話をする。 ・新出単語の意味や発音・アクセント等を知る。 ・本文の音読練習をする。 ・本文に関する英語の質問に答える。 ・I thinkを用いて，セルジオの活躍に対する自分の感想を書く。 ・班で感想を交流する。	ウ②	WS
5	○同等比較の意味・構造を理解する。 ・説明を聞いて，as～as･･･の意味・構造を知る。 ・形容詞や副詞（tall, old, interesting, difficult, hard, easy, beautiful, important）を用いた文の口頭練習を行う。 ・同等表現を含む文を聞いて，書く練習をする。 ・同等表現を用いて，「世界に紹介したい日本で有名なもの」について書く。	ウ①	WS
6	○物語全体を通して内容を読み取り，自分なりの感想や意見を持つ。 ・同等表現を用いて，「世界で広めたい日本で有名なもの」についてペアで対話する。 ・新出単語の意味や発音・アクセント等を知る。 ・本文の音読練習をする。 ・本文に関する英語の質問に答える。 ・I thinkを用いて，セルジオの生き方に対する自分の考えを書く。 ・班で意見交流をする。	ウ②	WS
7	○日本を象徴するものを英語で説明する。 ・比較級・最上級・同等比較を用いて，「世界に誇れる日本の建物など」を説明する英文を考える。 ・日本を代表する建物の写真を見ながら，個人で説明文を考える。 ・班で話し合い，説明する建物を決める。 ・班で相談しながら，英文で説明文を書きながら，内容を増やしたり，英文を校正したりする。 ・班で説明文を読む練習をする。	ア①	活動
8	○日本を象徴するものを英語で発表する。 ・班で説明文を読み合い，校正をする。 ・班で説明文を読む練習をする。 ・班内の役割に基づいて発表する。 （説明担当・スライド提示担当） ・発表を聞いて，分かったことや感想を英語で書く。	イ①	発表

（２）目標・指導・評価の一体化を図ることについて

「身近なものや人に関する事実を説明する力をつけること」に関する目標を「比較表現を用いて，世界に向けて日本を象徴するものの説明文を発表する」とした。ただ単に説明文を書いて発表するのではなく，習得した比較表現を用いて説明文を書き，それを元にしてペアで説明をしあったり，I thinkを使ってコメントを述べたりするコミュニケーション活動を取り入れた。そして，事実について説明する発表においては，聞いて分かったことを個人で書き理解度を確かめさせ，他者の発表を聞いて自分なりの感想を書いて意見交流できるようにした。

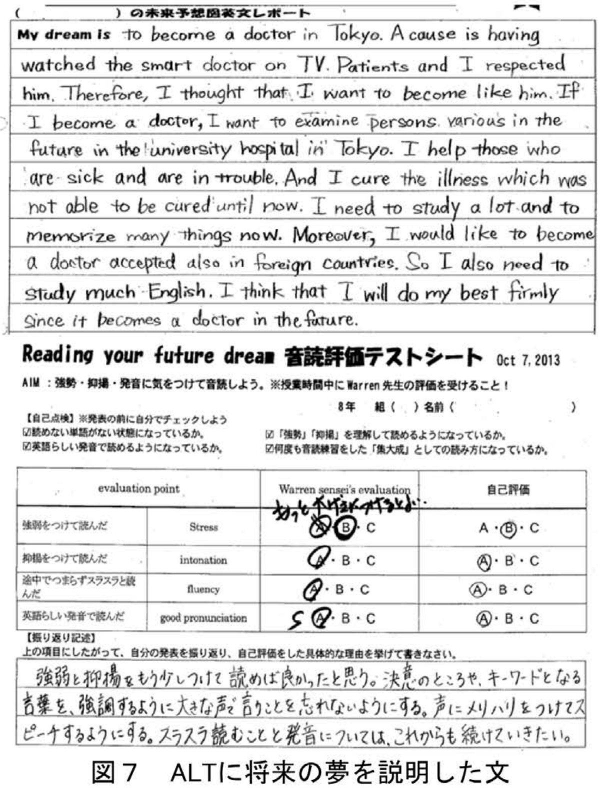
（３）各単元でのコミュニケーション活動を充実させることについて

Program9では比較表現を用いて，身近なものや人に関する事実を説明する力をつけることをねらいとしている。新出の文法事項を学び，パターンプラクティスを繰り返し，本文の内容を理解させるだけでは，活用できるまでには至らない。コミュニケーション活動を充実させるためには，学んだことを活用できるような出口活動の工夫が必要である。学ぶ意欲や興味関心に差があり，ペアや班で交流することがむしろ私語につながることが多い実態があるので，個人で考えを深め，それを書いてまとめ，スピーチをする活動をくり返し行った。スピーチの様子をiPad miniで撮影し，各グループ内で発表の様子を見合うように計画したが，予算の都合でiPad miniを３台しか購入できなかったため，グループ内で自分の発表の様子を客観的に分析する学習を計画することができなかった。この点においては，学習環境づくりの課題なので，来年度以降検討していきたい。

また，Program9を行うにあたって，教育実習生が指導を担当するProgram6からProgram8の単元の指導過程を見直した。生徒実態を考慮し，今年度は教科書各単元でのコミュニケーション活動を充実させ，生徒がコミュニケーション活動をより現実的に受け止めることができるように，特に書く活動と話す活動を中心に表４に指導内容や目標，コミュニケーション活動を位置づけた。

表４　指導内容・目標・活動

単元	文法・内容	関わるコミュニケーション活動の目標	「比較表現を用いて,事実を説明する力をつける」につながるコミュニケーション活動
Program 6	to 不定詞の名詞的用法・副詞的用法・形容詞的用法	○将来の夢についてスピーチをする。	I want to～を使って，自分がしたいことを書く。Because を使って，なぜしたいか理由を書く。不定詞を使って，目的について書く。書いたことをもとにスピーチをする。他者の発表を聞いて，コメントを伝える。
Program 7	動詞の-ing 形 look＋形容詞 become＋形容詞 主語＋動詞＋人＋もの 助動詞 should, must 接続詞 therefore, then, so	○三原中学校の問題点と改善点を考えてスピーチをする。	三原中学校の問題点を考える。I think that を使って，課題に対する自分の考えを書く。Because を使って，そう思う理由を書く。今後はどうすべきかを should を使って書く。接続詞 therefore, then, so を使って，結論を書く。
*My Project5	to 不定詞/動名詞 I think that･･･等の既習事項	○ALT に将来の夢について説明する。	Program 6 で作成したスピーチ原稿を元に，新しい表現を加えて，将来の夢を ALT の前で音読する。
Program 8	既習表現の復習	○登場人物の気持ちを考えて音読発表する。	登場人物の気持ちを考えながら，強勢や抑揚をつけて音読発表をする。
*Program9	～(形容詞)＋-er than / the～(形容詞)＋-est / as～as･･･	○比較表現を用いて,身近なものや人に関する事実を説明する。	比較表現を用いて，世界に誇れる日本を代表するものの説明文を書く。外国の方に紹介する場面を想定し,Show and Tell をする。


（　　　　）の未来予想図英文レポート

My dream is to become a doctor in Tokyo. A cause is having watched the smart doctor on TV. Patients and I respected him. Therefore, I thought that I want to become like him. If I become a doctor, I want to examine persons various in the future in the university hospital in Tokyo. I help those who are sick and are in trouble. And I cure the illness which was not able to be cured until now. I need to study a lot and to memorize many things now. Moreover, I would like to become a doctor accepted also in foreign countries. So I also need to study much English. I think that I will do my best firmly since it becomes a doctor in the future.

Reading your future dream 音読評価テストシート　Oct 7, 2013

AIM ：強勢・抑揚・発音に気をつけて音読しよう。※授業時間中に Warren 先生の評価を受けること！

8年　組（　）名前（　　　　）

【自己点検】※発表の前に自分でチェックしよう
☑読めない単語がない状態になっているか。
☑英語らしい発音で読めるようになっているか。
☑「強勢」「抑揚」を理解して読めるようになっているか。
☑何度も音読練習をした「集大成」としての読み方になっているか。

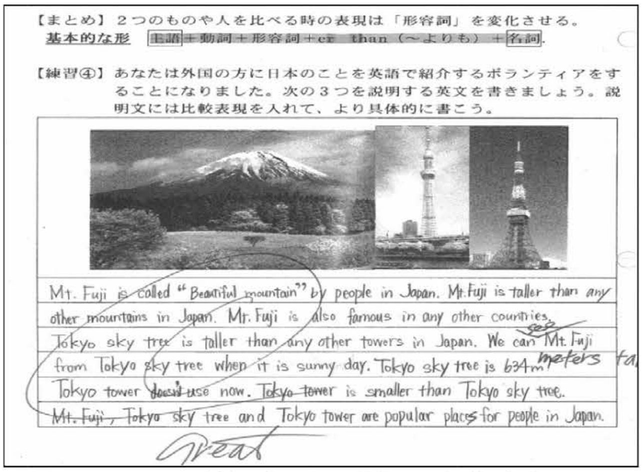
evaluation point		Warren sensei's evaluation	自己評価
強弱をつけて読んだ	Stress	A・B・C	A・B・C
抑揚をつけて読んだ	intonation	A・B・C	A・B・C
途中でつまらずスラスラと読んだ	fluency	A・B・C	A・B・C
英語らしい発音で読んだ	good pronunciation	S A・B・C	A・B・C

【振り返り記述】
上の項目にしたがって、自分の発表を振り返り、自己評価をした具体的な理由を挙げて書きなさい。

強弱と抑揚をもう少しつけて読めば良かったと思う。決意のところや、キーワードとなる言葉を、強調するように大きな声で言うことを忘れないようにする。声にメリハリをつけてスピーチするようにする。スラスラ読むことと発音については、これからも続けていきたい。

図７　ALTに将来の夢を説明した文

図７はMy Project5で将来の夢をALTに紹介する話す活動に使用したワークシートである。Program6でも単元の指導内容に沿って簡単なスピーチを行っていたので，生徒たちは既習事項を多く用いたスピーチ原稿を書いていた。昨年度の課題をふまえて学んだ知識を活用しながら，技能そのものが身につくようなコミュニケーション活動の充実を図る必要性を考慮し，書くことだけに留まらず，それを用いた言語活動の充実を図った。図８はProgram9で使用したワークシートである。自分の考えを書く時間を取り，書いたものを元に簡単なペアトークを授業の始めの帯活動として行った。最終的には，ペアで会話をし，感想やコメントを言い合いながら，ペアや班で教え合うことができるのが期待する生徒の姿であるので，それを習慣化できるように指導を継続していく必要がある。


【まとめ】２つのものや人を比べる時の表現は「形容詞」を変化させる。
基本的な形　主語＋動詞＋形容詞＋er than（～よりも）＋名詞.

【練習④】あなたは外国の方に日本のことを英語で紹介するボランティアをすることになりました。次の３つを説明する英文を書きましょう。説明文には比較表現を入れて、より具体的に書こう。

Mt. Fuji is called "Beautiful mountain" by people in Japan. Mt. Fuji is taller than any other mountains in Japan. Mr. Fuji is also famous in any other countries. Tokyo sky tree is taller than any other towers in Japan. We can see Mt. Fuji from Tokyo sky tree when it is sunny day. Tokyo sky tree is 634m meters ta… Tokyo tower doesn't use now. Tokyo tower is smaller than Tokyo sky tree. Mt. Fuji, Tokyo sky tree and Tokyo tower are popular places for people in Japan.

Great

図８　比較級を用いて説明した紹介文

（４）成果と課題

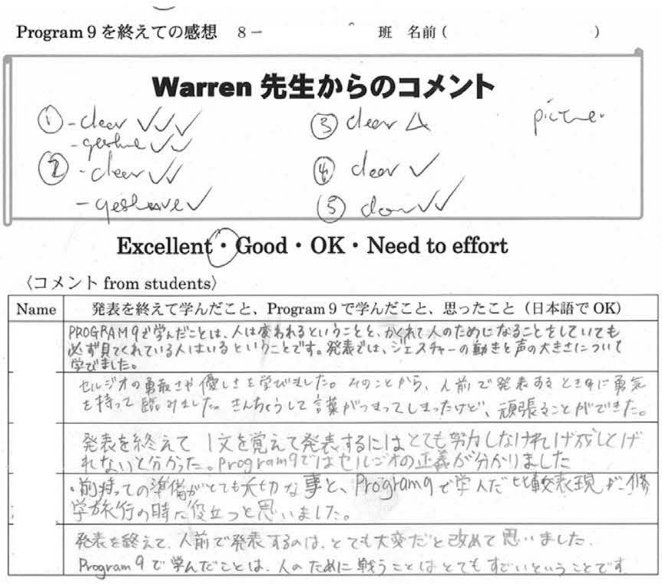
Program9の最後の活動は，日本を象徴するものを英語で発表することである。写真を見せながら紹介するShow and Tell形式をとり，発表練習の際には，図９のようにiPad miniを操作しながら練習を行った。iPad miniを用いれば注目させたい画像を発表内容に合わせて大きくしたり，小さくしたりすることもできる。図10のように，発表者はプロジェクターの画面，聞いている生徒の様子，発表画面を確認しながら発表することができていた。発表の場は公開研究会とALTとの授業の２回を設定した。特に公開研究会で発表した班は，翌週のALTの授業で全班がやり直したいと希望を出し，再度発表を行った。授業終了時の生徒の振り返り文から多くのことに気づかされた。教科書各単元でのコミュニケーション活動を充実させれば，知識の定着だけではなく，生徒の意欲や関心も高められることが分かった。今後も各単元レベルで充実したコミュニケーション活動ができるように，指導計画を見

直していきたい。

○たくさんの用語を使って色々な表現ができ，またそれをみんなの前で発表することができたので，とても楽しかった。 ○読むよりも，覚えて話す方がはっきりと言えることが分かった。 ○今回の発表会を通じて比較級と最上級を使うことで分かりやすくなることと，ジェスチャーを使うことで明るくなることの２つを学びました。 ○セルジオの正義を含め，立派な生き方とその子どものマリオの人生がよく読めた。発表はかみかみだったが，最後まで頑張れた。 ○セルジオの勇敢さや優しさを学びました。そのことから，人前で発表するときに勇気を持って挑みました。緊張して言葉が詰まったけど，頑張れた。

図９　iPad miniを使って画像を確認する様子

図10　発表している様子



Program 9 を終えての感想　8－　　班　名前（　　　　）

Warren 先生からのコメント

① -clear ✓✓✓ -gesture ✓✓
② -clear ✓✓ -gesture ✓
③ clear △
④ clear ✓
⑤ clear ✓✓
picture

Excellent・Good・OK・Need to effort

〈コメント from students〉

Name	発表を終えて学んだこと、Program 9 で学んだこと、思ったこと（日本語で OK）
	PROGRAM 9で学んだことは、人は変われるということと、かくれて人のためになることをしていても必ず見てくれている人はいるということです。発表では、ジェスチャーの動きと声の大きさについて学びました。
	セルジオの勇敢さや優しさを学びました。そのことから、人前で発表するときに勇気を持って臨みました。きんちょうして言葉がつまってしまったけど、頑張ることができた。
	発表を終えて　1文を覚えて発表するにはとても努力しなければ成しとげれないと分かった。Program 9ではセルジオの正義が分かりました
	・前持っての準備がとても大切な事と、Program 9で学んだ比較表現が修学旅行の時に役立つと思いました。
	発表を終えて、人前で発表するのは、とても大変だと改めて思いました。Program 9 で学んだことは、人のために戦うことはとてもすごいということです

図11　振り返り文

６．研究の成果と課題

（１）小学校の成果と今後期待される取り組み

本年度の３つの取り組み課題（①英語を学ぶ意欲を高める。②話し手・聞き手としての意識を高める。③挑戦的自己発信の場を作る。）を達成するために，留学生との交流が単元後の活動として設定された。本活動により知らない人との会話に挑戦し，緊張しつつも達成感を感じた児童の様子や,「少し間違えたから，次はすらすら言えたらいいなと思った」等，更なる学習への意欲を高めた児童の様子が伺え，一定の成果を得たといえるだろう。

私たちの，授業という枠を超えて英語を使用する機会に乏しい学習環境を考えると，いかに英語を学ぶ意義を児童に感じさせられるかが，長く続く学習を支えるためには重要になる。外国の方との交流は，英語を学習することの意義を児童が実体験として理解する好機となるものであり，準備の大変さを超える価値のある取組といえるだろう。知識・技能として英語を知っていること，操れることイコール英語を用いてコミュニケーションを図れることではない。英語を用いて真のコミュニケーションを図るためには,「伝えたい」「知りたい」という気持ちと，それを実行に移す行動力が欠かせない。小学校段階では，言語技能面では不十分な点も多いが,「伝わらなかった」「もっと聞きたかった」という体験をさせることが，外国語の知識や技能習得への動機づけになるだろう。したがって，言語知識やスキルの指導だけがそれらの習得を後押しするのではないことを理解し，中学校へと続く英語学習を支える意欲を，真のコミュニケーション体験を通して育てていくことが，今後も継続的な課題となるだろう。

また，今年度は「聞き手」としてのあり方にも着目し，相手が気持ち良く話せる聞き方を考えさせたが，これを知識・理解にとどめるのではなく，授業内のコミュニケーション場面において自然に発揮されるよう指導する側も継続的に意識することが重要である。本年度の実践の継続と発展が今後に期待される。

（松宮奈賀子）

（２）中学校の成果と今後期待される取り組み

１年生では,「人物紹介」の場面で，つながりのある英文を書かせるために，考えをまとめるところから，代名詞や接続詞を用いて文と文とを関連づけるところまで，段階的な指導が行われた。

２年生では,「日本文化の紹介」の場面で，比較表現を用いて事物を口頭で説明するために，グループ内で役割を分担して，タブレット型端末を効果的に用いたプレゼンテーションが行われた。

本年度の成果としては，次の２点が挙げられる。
〇学習内容としては，知識・技能の活用のために，コミュニケーション活動を単元ごとに設定したこと。
〇指導方法としては，ペア・グループなど多様な学習形態を用いたり，ICTを活用したりしたこと。

今後は，目標・指導・評価のさらなる一体化のために，次の３点の取り組みが期待される。

① 単元目標と本時目標との関連を明確にする

単元を構成する各時間にはそれぞれの目標があり，それらが関連し合って単元の目標の実現につながる。単元中の各時間では，教えるべき知識や習熟させる技能を教師が具体的に把握しているだけでなく，生徒にも本時の目標として理解されている必要がある。また，単元目標との関連において，本時の学習の位置や重要性が認識されている必要もある。

② 学習形態やICTを目的に合わせて活用する

ペア・グループ学習には，生徒の主体的な学習を促進する効果が期待できる。また，ICTは，授業の効率化・多様化に役立つ。これらの有効な方法を，授業の目標や目的に合わせて選択し，成果を上げるような利用法を工夫したい。

③ 目標を具体化する

can-do listの作成と，それに基づいた指導・評価の改善については，全国の中学校・高等学校に共通する課題である。本校でも，実際の指導・評価に生かせるように，年間指導計画も含めての検討が必要である。

（樫葉みつ子）

（３）今後の展開

最後に一つ実践を見ていて気になったことを書く。それは児童・生徒が発する言語表現（英語）と非言語表現（ジェスチャーなど）が，時に児童・生徒の「からだ」と「こころ」から乖離しているようだったことである。ジェスチャーが取ってつけたようで，英語が口先だけの構音のようだった。児童・生徒は，「あたま」では，「ジェスチャーをしなくてはならない。英語をしゃべらなければならない」とわかっているので身体を動かすが，それはどこか操作された機械部品のようで，「こころ」の発動としての「からだ」に思えない。逆に言うなら，身体が生きた「からだ」になっていない。だからそこに「こころ」が感じられない。かくして，ジェスチャーも英語も何ら聞く者の「こころ」に訴えてこないし「からだ」にも響いてこない。ある中学生は金閣寺について建てられたのは何年でなどと（やや早口の）英語を発していたが，その英語は構音が十分でないといった以上の理由で，私の耳には入ってこなかった。「そもそも，この生徒はこのことについて自分で本当に表現したいとは思っていない」とすら思えた。

神経科学のダマシオの理論を換骨奪胎して表現するなら，人間の基底層は＜非意識＞で，それは人が自覚できない身体の生命の動きがある生理学的領域（「からだ」）である。その身体の生命の動きを自覚したのが「こころ」という心理学的領域であり，これを＜中核意識＞と呼ぶことができる。私たちは言語を頭の中でも口に出しても使い，その言語使用により「今・ここ」を超えた意識世界（「あたま」）を構築するが，その＜拡張意識＞という言語学的領域は，あくまでも非意識（「からだ」）と中核意識（「こころ」）の重層の上に成立しているものに過ぎない。しかし今回の児童・生徒の英語発話の一部からは「からだ」と「こころ」が十分に感じられず，「あたま」だけの仕事のように見えたというのが私の懸念である。もっともこれは日本中で観察されることではあるが。（柳瀬陽介）

参考文献

１）文部科学省：『小学校学習指導要領解説　外国語活動編』，平成20年８月
２）文部科学省：『中学校学習指導要領解説　外国語編』，平成20年９月
３）ELEC同友会英語教育学会実践研究部会：『段階的スピーキング活動42』，pp.20-29，2008，株式会社三省堂
４）萬谷隆一他編：『小中連携Ｑ＆Ａと実践　小学校外国語活動と中学校英語をつなぐ40のヒント』，2011，開隆堂出版株式会社
５）松尾砂織・村上直子・柳瀬陽介・樫葉みつ子：「書く力を養う英語科の教材および学習指導開発」，広島大学　学部・附属学校共同研究機構研究紀要，第40号，pp.369-230，2011.
６）松尾砂織・小廣川和恵・安松洋佳・樫葉みつ子・柳瀬陽介・松宮奈賀子：「新学習指導要領の下での授業実践－小中連携を意識した学習指導について(1)－」，広島大学　学部・附属学校共同研究機構研究紀要，第41号，pp.219-228，2012.
７）東野裕子・髙島英幸：『プロジェクト型外国語活動の展開―児童が主体となる課題解決型授業と評価―』，2011，高陵社書店

ⅰ　正式名称はPeace Education in Hiroshimaで，外国籍の方を対象に，本校生徒が英語で平和公園をガイドすることを中心とした活動である。